

卓 話

平成 17 年 2 月 8 日

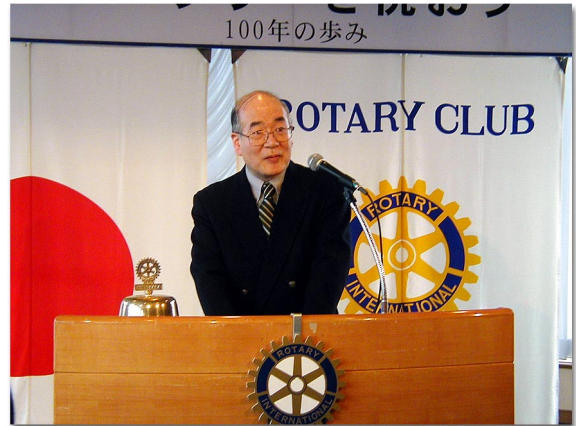
『能のあじわい方、謡の楽しみ方』

能楽師 橋本擴三郎様

只今、ご紹介をいただきました京都から参りました橋本擴三郎でございます。

“能楽師”と申し上げましたが、先ず、皆様の中にも「能」と「能楽」の違いとは何かをご存知ないかたもいらっしゃると思います。

「能楽」とは「能」と「狂言」をひとまとめにした総称を言います。ですから、例えば私の場合は、「能楽師 観世流 シテ方」となります。また、狂言師の方であれば、例えば「能楽師 和泉流 狂言方」等と正式には申します。



「能」の印象は人によって誠に様々です。“幽玄”“ワビ・サビ”“豪華”“簡素”等々、各々多様な印象ですが、各々が全て正しいとも言えます。なぜなら、「能」にはいくつかのテーマや番組があり、ご覧になった作品によって印象が全く異なるのです。

例えば、女性が主人公の舞台であっても、華やかな物腰もあれば、その余りにも静かな物語の展開で、死ぬ程退屈と感じられるものもあります。

その昔、「能」と言えば、朝から夕方にかけて五番（一つの番組が約一時間半余りです）観ていただいていた時代がありましたが、忙しい現代では、二番から三番を組み合わせ観ていただいています。

また、「能」は写実の世界ではなく、イメージの世界でもあります。三間四方（約 5.4 メートル四方）の舞台には、大道具もなく老人役、女性役等の際につける“面”も決してリアルなものではありません。全て、演者の「声の調子」「謡い方」「舞い方」等の表現力と、それを観る観客のイメージでストーリーがふくらんでいきます。正に演者と観客次第で“自由自在”であると言えます。

また、「謡」は“舞台”や“舞い”等の表現の場こそありませんが、それ故にこそ「能」を常に意識して謡うことが大切です。「能」の様に、立って謡うこともなければ、舞ったり、面をつけることもありません。（面をつけることは、能役者にとって異世界に入っていくための大きな意味があります。）しかし、それ故に謡い方によって、面に左右されない、役のイメージを作り上げることもできるのです。

これからも、是非、皆さんにも、その様な気持ちをもって楽しんでいただけたらと思います。